



AA日本ニュースレター

〒100-91
東京都中央郵便局
私書箱 916

AA 日本ゼネラル・サービス・オフィス TEL 03-3590-5377
〒171-0014 東京都豊島区池袋 4-17-10 土屋ビル 4F FAX 03-3590-5419

No. 71

99 全国評議会に向けて

常任理事会／企画担当 今井



『グループの良心を評議会へ』というテーマで第4回全国評議会は開催する。

このテーマは、全国のAAグループが望んでいる、必要としているサービスを評議会で話し合い、全体サービスを効果的に運びたいという評議会メンバー全員の意志の現れであろう。

『全国の代議員は厳しい目と耳をもって』評議会を注視して欲しい。

毎年の評議会開催経費は200万円位上となる。全てがグループの献金で賄われている。しかし、少々乱暴な表現だが、『お金を出したら元を取る』といった意識があまりにも代議員には薄いのではないだろうか？ 評議会後の評議員報告会にはバラバラといった参加しか見られないし、白熱した議論もないうまま、淡々とした報告で終わってしまっている。どうやって代議員は評議会の報告をホームグループに伝えているのだろうか？

『評議会報告書は関心をもって読んで欲しい』ことから、第4回評議会報告書はグループに1冊だが無料配布することが決まった。(先日、アメリカの地区委員会副議長をしているメンバーがJSOに来た時、報告書の配布について聞いてみた。その方法は、地区委員会がGSOに有料で注文し、希望した代議員に無料で配布する。評議会への関心は高く、ほとんどの代議員が注文すると話していた。報告書の組み立ては、承認された議案の経緯、不承認となった経緯などが事細かに報告されているという。事務局の一層の努力も期待しなければならない。それ

には事務局や役割を担う層の厚さが必要であり、メンバーの協力をお願いする限りである。

『評議員は自分の地域の声が』評議会に届くために、評議会議事委員会が全国のグループ代議員宛に郵送で議事項目を要望している。結果は今のところ2～3通しか届いていない。

『どうすれば全体サービスに活力が生まれるのか』を徹底して来年2月の評議会で討論することが必須な課題である。

評議員の任期は2年である。評議員としての役割を十分に果たすためには、全体サービスを評議員に選出されてから学習してなどと考えていたら任期が終わってしまう。また、選出されてから今までの評議会の議事内容を確認することは膨大な資料を読まなくてはならない現実がある。

評議会で決定したサービス活動を実行していく常任理事会の各委員会活動を実行する委員の人材も不足している。しかし、毎年の評議会では確実に活動方針が採択され、実行を任されるのが現状である。

だれでも『よいことはやろう』と決めることはできる。しかし、実行するための役割を担うメンバーが現れない。そのことも来年の評議会で話し合う重点項目であろうが、その前に、常任理事会は各委員会活動の役割を明確に伝えること、今後検討する活動内容を的確に打ち出すこと、実行されている活動を具体的に報告する努力を積極的に検討しなければならない。

全体サービスはグループメンバー、代議員、地区委員会、地域委員会、評議会の全メンバーが一体となって行動しなければ体系としての意味をなさない。問題点は分かってきた。あとは、どう具体的に行動を起こすかだ。もう一つは、AAグループの全メンバーの目、耳が評議会に集中しているという緊張感を評議会に育てなくてはならない。

そのためには、評議会を通じて、グループから直接でも、『グループの良心』が評議会に届くことを願っている。

ワールドサービス、アジア・オセアニア サービスミーティングの裏方たち

常任理事会 事務局

10月4日から8日まで、ニュージーランドのオークランドで、第15回ワールドサービスミーティングが開催されます。以前本誌でもお知らせしましたが、今回日本のAAは、WSM評議員選出の際、語学能力よりも、全国サービスの経験があり、全国レベルのサービスに通じ、日本代表者としてふさわしい熱意のある人という条件の方を重んじて、現常任理事会議長の山宮さんをWSM評議員に選出しました。そして前回のWSMで採決された勤告通り、ニューヨークのWSM事務局に通訳を手配してもらえよう依頼しました。事務局では早速、開催地のオークランドの現地事務局と連絡を取りながら、力を尽くして通訳を探したのですが、ボランティアは見つからず、専門の同時通訳者に依頼した場合2百万円近くの経費が余分にかかり、現実的に不可能だという結論に達し、滞在費、食費はすべて事務局でもつので、なんとか日本で航空運賃を負担して同時通訳者を連れてきてもらえないかという連絡が届きました。

日本でのプロの同時通訳を依頼してもやはり同じくらいの経費がかかってしまいます。そこでボランティアで5日間もの会合にニュージーランドまで出て行って同時通訳をしてくれる、サービスにも通じた人がAAの中にいるのか、常任理事会では頭をひねって考えました。(もしいたなら、その人がWSM評議員になっていたでしょう)

そんなときたまたまカリフォルニアのメンバーからアメリカ・タナグの西太平洋地域のサービス会議に日本からオブザーバーで出席しないか、同時通訳のボランティアが何人かいるので言葉の壁は気にしなくてよいので、日本のサービネ体系に参考になるからぜひ、というお誘いが入りました。このメンバーはサンディエゴで開かれたAA60周年のとき、日本のメンバーたちの世話や通訳のお手伝いをしてくれた人です。べらんめえ調の流暢な日本語を話し、サービスマニュアルの生き字引のような人で、カリフォルニアで聴覚障害者のAAグループを作り、すべてのAA会議で手話通訳をつけることを決定させるまでもっていったとてもサービスに熱心なメンバーです。以前、日本のミーティングハンドブックの大文字版を作ってすべての漢字にルビをふってわざわざカリフォルニアから送ってくれた人でもあります。

この人に聞いてみたら、だれか同時通訳の能力があって、時間も取れて、日本のAAの手助けをしてくれる人を探してくれるかもしれない。でも、厳しい条件も添えました。航空運賃、ホテル滞在費、食費は提供されるけど、通訳料はなし。会議は毎日朝の9時から、夜の9時、10時までまるまる5日間。発言権も投票権もなし、ただ一つのメリットは、ふだんはクローズドのWSMに全面的に参加できるということだけ。こんなムシのよい日本のお願いに彼はむっとするのはないかとメールを送りました。そして翌朝メールを開いてみると、「もし、私でよければ、ぜひ、ぜひ、WSMの通訳の仕事をください。こういうチャンスは二度と来ないものです。すぐに上司から休暇の許可をもらいました。サービス体系も理解しているし、後は、各サービス用語の英語と日本語の対訳表を作って勉強します。もし私にやらせていただけるなら、全力を尽くして、日本のWSM評議員が十分に会議に参加できるよう、一切言葉の壁を感じることはないよう、がんばります。ブックブックの146ページに“われわれのほんとうの目的は、神と周囲の人びとへのできる限りの奉仕に自分を捧げることである”と書いてあります。これは奉仕に自分を捧げる新たなチャンスです」

このような次第で、7月の常任理事会で正式にこのカリフォルニアのメンバー、ダグさんに山宮の同時通訳をお願いしました。ダグさんはほかの参加者たちに迷惑がかからないようにと、自分たちの地域サービスで利用している同時通訳の機器を持ち込んでくれるそうです。国際的なビジネスマンで、年中日本とアメリカを往復しているダグさんは、現在、仕事の合間を縫って、過去のWSMの日本語、英語の資料の勉強をしている最中とのこと。文字通り国境を越えた協力により、日本のWSM評議員がフルに会合に参加し、世界のAAの経験の分かち合いを共有し、帰国してわが国のAAのために役立てていただけることを期待しています。

一方、来年3月にオーストラリアのシドニーで開催されるアジア・オセアニア・サービス・ミーティングに向けても、事務局となっているJSOでは年間を通じ、アジア・オセアニアの諸国に向けて、参加を呼びかけたり、ニューズレターを発行したり、意見を求めたりという仕事を、オーストラリアの議長と協力しながら行っています。たまたま、次号の

アジアオセアニアニューズレター発行に向けて、この領域内の国々すべてにいろいろなお知らせを送付する時期にぶつかったとき、J S Oの事務局員が病気でやむなく自宅療養となったため、オーストラリアにその事情を伝えたところ、さっそく返事がファックスされてきました。

「ここであなたが自宅で無理をするよりも、何もしないで早くよくなってください。今回の仕事はオーストラリアですべて引き受けます。わが国の常任理事会、国際担当議長のアンがすべてを引き受けてくれました。あとのことはアンとあなたが直接インターネットで連絡を取り合ってください」

そして、迷惑をかけて心苦しいという私の言葉に対するアン返事です。

「あなたが療養されている間、私がどんな方法であれ、お役に立てることは、私にとってこの上もない喜びであり、誇りです。

私は以前、オーストラリアのワールドサービスマーケティング評議員をした経験があります。1978年のフィンランドと、1980年のニューヨークのWSMに参加しました。その役割を終え、以来、そのような心躍るAA活動から離れてしまったことに一抹の寂しさを感じていました。でも私に与えられたあのようなチャンスに感謝し、あのと時の経験を心の宝物として大事に育てて来ました。そんなわたしに今、AAの国際的な活動に参加するチャンスが別の方法で与えられたのです。それはわたしにとって、また別の意味で心躍ることです。

今このようなかたちで日本のAAと一緒に活動できるなんて、私にとって信じられないことです。私が出席したWSMのどちらにも日本の参加はまだありませんでした。でもビッグブックが日本語に翻訳されたおかげで、日本でもAAがこれほどの成長を遂げたのです。私は1985年にモンリオールで開催されたAA50周年に参加しましたが、そこで日本語のビッグブックがAAの共同創始者の未亡人、ロイス、Wに贈呈されたのをこの目で見ました。

早速仕事に取り掛かります。そして進捗状況をあなたにお知らせします。どうか、早くよくなってください」

このような裏方たちの協力で、日本のAAは大きく助けられながら、活動を続けているわけですが、日本のAAメンバーたちも、世界のAAの発展に向けて大きな力を与えてくれました。以下に国際出版基金献金について報告させていただきます。

国際出版基金献金へのご協力ありがとうございました。

4月末にグループ、メンバーの皆様へ呼びかけた国際出版基金特別献金に対して、多数のグループ、メンバーのかたがたから特別献金をお寄せいただきまして、どうもありがとうございました。

6月10日のAAバースデーにちなんでの特別献金の呼びかけでしたが、今回初めての試みということもあり、献金受付の締切日を明記しなかったため、皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びします。6月末で締め切る予定だったのですが、各グループからは6月のビジネスミーティング終了後に送金があったため、結局7月末日現在で集まった金額597,014円を全額ニューヨークに送金しました。この献金が基金としてどのように使われたかは、10月のWSMにてニューヨークのG S OからWSM評議員に報告があります。

献金をしてくださった一人一人のメンバーのかた、一つ一つのグループのかたに直接お礼状を差し上げるべきところですが、紙面をお借りし、心からご協力感谢您します。ありがとうございました。まだAAのない国、自国語のAA出版物がないため、回復の方法を見出せないでいる国のアルコールクに、少しでも協力できたことをほんとうにうれしく思っています。“自分たちに与えられたものを次の人に手渡して行く”ことを実行していくうちに、AAの愛の手は必ず世界中に届くことと思います。

もう一度アノニミティについて

「44Q&A」の翻訳改訂版を発行するにあたって、出版局ではかねてから問い合わせを受けることの多かった部分をより明確に表現するよう努めました。なかでも、旧版の最後の質問のページの答え、「AA内では、つまりAAミーティングの場やメンバー間では、AAメンバーはアノニマスではないことも付け加えて

おく」という文章については、メンバーの方から何件かのお問い合わせを頂きました。この表現は、マスコミに対してメンバーは名前を出さないという説明に対比させて、AAの中ではアノニマスではない、といっているのですが、いろいろな受け取り方ができると思います。そこで翻訳改訂版では日本語でより明確に表

現したいという意向でその正確な意味を、原本の発行者であるAAワールドサービス社に問い合わせました。つまり、ここでいっている「アノニマスではない」という言葉は、単に名前を隠さない、という意味なのか、あるいは伝統12の“無名であることが伝統全体の霊的基礎である”という部分のアノニミティまで否定していることなのか、と。

以下がその回答です。

「アノニミティについてのお問い合わせありがとうございます。翻訳するにあたって、どういう表現を使ったらよいか迷われているとのこと、驚くに当たりません。なぜなら私たち英語を話す人間でさえ、ビッグブックの英語版で言われているアノニミティの意味を明確に首尾一貫して理解しているのか、極めて疑わしいからです。

アノニミティについてはさまざまな考え方があり、それぞれの国や地域によって全く違うとらえかたをされていることがあります。そのような状況で現時点まで広がってきました。したがって“AAメンバーの間ではアノニマスではない”という表現があったとき、その正確な意味を回答するのは大変難しいことのように思えます。

“AAメンバーの間ではアノニマスではない”という表現はドクター・ボブの言ったことといわれています。つまり“AAの集まりの中ではフルネームを使った方が、AAメンバーとしてふさわしい。そうすればお互いに連絡が取り合える。自分のフルネームを出さないというのは、新聞、ラジオ、映画といったマスメディアのレベルだけのことを言っているのだ”この考え方はさらに“この仲間の集まりの中でアノニミティを守るのは、公の場でアノニミティを破るのと同じくらい、伝統11に反する行為だ”という考え方に発展していきました。

・AA記録/古文書の元担当者のフランク・Mによると、実際にドクター・ボブがこのように話したという記録は見つからないが、彼がそう話しているのをクリーブランドの草創期のメンバーが記憶しているということです。

アメリカ国内でも、ミーティングでフルネームを使

っているところと、フルネームは使わないところと、地域によってさまざまです。

わたしたちに分かっているのは、新聞、ラジオ、映画のレベルではわたしたちはフルネームを使うべきではないという伝統11で明確に現されている表現です。

アノニミティについて述べられているものがもう一つあります。“各AAメンバーは自分で必要なだけアノニミティを守る権利がある。したがってそれぞれの考え方やり方が違っていても、その違いはこの集まりの中で尊重されるべきものである”というものです。

アノニミティについての疑問は、伝統12に及ぶとさらに複雑になります。なぜなら、この伝統ではAAの集まりの中では個人よりも原理を優先させ、ひとりひとりが謙遜さへの霊的な旅路をたどることに重きが置かれているからです。

ここでは個人としての考え方をお伝えしているわけで、翻訳の表現をこうすべきだとか、ともかく、公式な立場であなたの質問に答えようとするものではありません。翻訳をどう表現するかはあなたの国の常任理事会か、それに携わる委員会の良心によってなされるべきものだからです。そうすれば、みんなが翻訳について、そして伝統について検討することができ、そこから、この意味についてかなりの理解がなされ、深まっていくでしょう。

パンフレット「アノニミティをご存じですか」が役立つと思いますが、さらに「12&12」の伝統11と12の章を委員会で読み合わせして話し合われるとよいでしょう。

地域レベルであれ、全国的レベルであれ、グループとしてなすべきことは、最善を尽くして本来のAAメッセージをそのまま、ゆがめることなく、忠実に運ぶ努力をすることです。

各人が伝統についての明確で首尾一貫した理解を得るということは、達成が難しい目標であり、むしろAAでは絶対に到達できない目標なのかも知れません。けれども、任されたしもべとして、本来の回復のメッセージをできるだけ明確にする努力はできます。

伝統や翻訳の表現を検討することで、今回の試みがいっそう充実したものになることを願っています。

リチャード、GSO

このGSOからの書簡を皆様と共有し、参考にしながら、再度、アノニミティについていっしょに振り返っていくことができたらと願っております。ちなみに、改訂版ではどうなったかという答えは今度発行された「44Q&A」の51ページをご参照ください。

出版局

